

ドイツのプロレタリア革命作家同盟

の創立について

— 私的な覚え書として —

小寺昭次郎

(一)

ドイツのプロレタリア革命作家同盟 (Bund proletarisch-revolutionärer Schriftsteller Deutschlands) は一九二八年一月一九日ベルリンにおける創立集会で正式に結成された。後の一九二九年度作家同盟活動報告中の「同盟創立の歴史のために」という項によれば、この日の出席者約一五〇名、作家、労働者通信員、労働者有志のほか、党代表一名が同席した。翌々日の「ローテ・ファーネ」はP・ブランドによる創立集会のかなり詳しい紹介記事を載せたが、その初めに「各国の革命的作家から寄せられた多数の挨拶の手紙や電報が披露されて、出席者の拍手をあげたが、それらは、法機関にきびしく追求されてきたドイツの書く革命家たちの組織的結集を、いかに重要視しているかの有弁な証言となっていた……」という言葉があった。

創立集会の席上、「われらの同盟」という題目で開会の挨拶に立ったヨハネス・R・ベッヒャーも、先ず同様

の点を指摘した。作家同盟は、ふどりのテイクフルで、誰かの頭の中でこしらえ上げられたものではない。当時、われわれの作品と仲間たちは、階級裁判によって追求されたが、まさにこの弾圧の下でわれわれは団結したのであり、そうして同盟は生れたのだ。われわれが今日なすべきことは、この事実を確認することであり、さらに一歩を進めることである。

法機関ないし階級裁判による追求という言葉では、例えばすでに一九二五年から行われてきたベッヒャー自身に対する大逆罪・瀆神罪等容疑の逮捕、告発事件が、マクシム・ゴーリキー、ロマン・ロラン等国际的な抗議と国内のベッヒャー擁護のデモ、集会等の運動とによる二八年の不起訴獲得というその結末とともに、直ちに思い起こされる。しかしまた、一九二八年一〇月といえば、二九年大恐慌のまる一年前、相対的安定期の最後の「年度初め」に当り、五月の選挙で一九年以降最大の投票数を集めて第一党（一五三議席）となったSPDが六月連立内閣を組織し、KPDも三二五万票、五四議席を得、他方ドイツチュナイオナーレやナチスが敗退して、一見「ドイツ労働者たちの間に階級意識と社会主義への意志が高まったかのような」（A・ローゼンベルク）観を呈したその選挙の後に当り、さらには七月から九月にかけてのコミンテルン第六回世界大会の直後の時期等々、いろいろの事実と問題が重なって出てくる。しかし、いまはすべて後まわしにして、ベッヒャーの言葉通り、階級の弾圧に抗する過程そのものが、同盟をつくり出す作家たちの団結であったという「この事実を確認」した上で、一応彼の話を要約しておきたい。（この「事実」は、創立集会をうつつした一枚の古ぼけた写真からも何となく感ぜられる。それは、ひどく奥行きがまったような演壇の半分を撮ったもので、暗い廊下か菜屋裏に通じていそうな半開きのドア口を背にしたベッヒャーが、両手で持ち運べるような小さな、妙に歪んだ演説台にうつむきかげんにして、折しもしゃべっており、そのすぐ左脇の長テーブルに、三人の男女が突にチグハグな位置と

姿勢で腰かけていて、写真説明にはB・ラスク、K・グリーンベルク、H・ロールベア。三人の背後の壁の飾縁かカーテン様のものと、男たちが着込んでいる背広とで、少しばかり祝祭的な感じがあるが、はつきりしているようでぼやけているそれら人物の目鼻立ちからは、ひとつのさし迫った問題を三人三様に考えつめているかのような、一種の清貧な雰囲気が出ているといった写真。創立集会そのものが非合法でもなく、臨検の警官がいたわけでもなさそうだが、これはやはり支配権力機構に追求され、抵抗している同志たちの集会にほかならぬ。

——閑話休題)

ところでそのベッヒャーの話の第二点は「下からの文学」(Literatur von unten)ということである。われらの同盟は、プロレタリア革命文学が存在するということの生きた証明である。その存在の可能性がブルジョア側だけでなく革命の側でも論議されていることは知られているだろうが(ついでに言えば、ここでベッヒャーはやはり慎重にトロツキーの名を避けたように思われる)、われわれはこの「下からの文学」を信じ、それが階級闘争におけるもっとも鋭利な、もっとも有用な武器であることを希望する。

われわれはわれわれの文学を待ちうけているわけにはいかない。腕をこまねいて坐しながら、われわれの文学が、名作の栄光につつまれてまだ現われて来ないなどと嘆いてはいられない。「下からの文学」は待たれるべきものではなく、誘発され、注意深く育てられねばならぬ。われわれは全力を投入して、強力な文学の後進を育て上げねばならぬ。彼らがわれわれ古い世代の欠陥から学んで、階級闘争の明確な内容を単純な説得的な形式に表現できるようにしなければならぬ。

次いでベッヒャーは、奉仕する者としての作家を強調した。われわれの同盟はいかなる名声も無名も知らない。ここでは誰もが学ぶ者だ。プロレタリア革命作家の主要な特性は、自分は他の人々の経験の組織者以上のもので

はないと意識していることである。彼は、自分の階級に、従って人類に奉仕する者だ。

現在は実りの多い革命の時期ではなく、革命家にとっては不作のきびしい年だが、それだけに却って、ここに集ったわれわれ同盟員は、いざとなればベンという武器だけにすがりついてはいないという覚悟ができてはいるはずだ。……といったイサマシイ発言のあとで、ベッヒャーは「同盟のもうひとつの課題」として、マルクス主義の文学への適用すなわちマルクス主義美学が、完全に未開拓な領域であることをはっきり指摘しながら、プロレタリア革命文学のいわば自己確認の問題を、文学集団・文学運動という視点からとらえようとする。

ひとつは批評の問題である。ベッヒャーは言う。われわれはソヴェトの作家たちのように、例えば細胞で著者の出席する読書会で行うような大衆批評を組織する状態にはなく、またメーリングが果たしたような教育的批評ももたないでいる。そればかりか、全ドイツの文学状況に創造的批評といえるものは存在せず、ブルジョアの文学営業がかもし出す自堕落なふやけた雰囲気にわれわれ自身が流されそうなき、「われわれは集団コレクティブとならねばならない。」同じ目的と同じ世界観に立つわれわれは「相互の率直な批判討論」という課題を遂行しながら、同盟をひとつの真の集団に創り上げてゆかねばならない。

そういう同盟の中でこそ可能なものとしてベッヒャーが期待した第二のものは、詩人や作家の手仕事の問題の討議である。すなわち、書く技術、構成、ことばの問題、造形フォルムなど、最近とくに表面化しているながら大きな場で十分に論議されずにきた創作上の要件を、「作品の有効性と侵透力のために」効果的に解決しなければならぬ。

さらにベッヒャーは、あらゆる種類のブルジョア文学とある種のいわゆる「労働者文学」に対して戦うための前提として、「敵対的文学の知識」という言葉を使いながら、文学伝統の継承について簡単にふれている。過去

・現在の文学の中にわれわれが学ぶことのできるもの、あるいは批判クリティシズムを加えて受け継ぐことのできる要素があるかどうかの検討を訴えてから、「われわれは独房から出てこなければならぬ。『壁の花』的なわれわれの現状を脱しなければならぬ」と語っている。(ついでに言えば、ここには、伝統継承の問題と、例えば一九三〇年ハリコフ会議でのベッヒャー発言にはっきり出ている大衆文学、大衆組織の問題との未分なからまりがあると思つてよいだろう)

「われらの同盟」と題するこの演説のさいごにベッヒャーがふれた論点は、プロレタリア革命作家とは何者かという問である。「革命的プロレタリアートの立場から世界を見、世界を表現する者」と答えてから、彼はゴリキーの長い文章を引用し、ゴリキーにならうて言う。「一九二八年の今日、われわれはこう叫ぶ。プロレタリアートとともに歩め！ 階級闘争の戦士となれ！ 大小をとわずすべてのことがらをプロレタリアートとともに戦え！ きみたちの芸術を武器として使え！ 戦争に対して宣戦せよ！」

「われわれの同盟を作家たちのあいだの戦友のきづなとしなければならぬ。われわれと大衆のあいだの結びつきをつくり出すものとしなければならぬ。労働者階級の闘争はわれわれの生活要因である。われわれはプロレタリアートの土壌にいつそう深く根を張ろうとする。だから同盟は、われわれが自分を役立てようとしている問題、すなわち社会革命というこの世界でかけがえのない偉大な問題に、いつそう固くわれわれを結びつけるものとならねばならない。」

(二)

以上、作家同盟創立集会におけるベッヒャーの「基調報告」ともいふべき話の要点を、かなりくわしく、なる

べくそのままの形で紹介しようとした。ところでこの創立集会では、ベンヒャーのほかにクルト・クレーパーの「同盟とその組織」、カール・グリューンベルクの「プロレタリア革命作家は同盟に何を期待するか」、スラングの「労働者機関紙は同盟に何を期待するか」等の報告ないし演説があり、さらに討議が行われたあと、ラインターナショナルを合唱して散会したことになる。そこで、これらの報告についてそれぞれの論旨を簡単に書き写しておく。

クレーパーの報告は、題名通り主として組織問題を取扱っているが、その初めに、組織結成の直接的な事情にふれている。前年創刊の「プロレタリシエ・フェイェトン・コレスポンデンツ」(P.F.K.)が創成の母胎となり、その編集部が関係各新聞とその寄稿者に「呼びかけ」を行い、暫定的な実行委員会の選出をアンケートしたこと、約二〇〇名の回答の中で推薦されたのは、Grünberg, Huhn, Toller, Mühsam, Becher, Lask, Abusch, Leo Lania, Piscator, Lorbeer, Klüber, Weinert, K. Kersten, Otto Steinicke, Hollischer, Peterson, Tucholsky などの他、その中から Becher, Grünberg, Lorbeer, Weinert, Huhn, Lask, Klüber, Peterson による仮幹事会がつくられたことを説明している。次いで、同盟の綱領草案が早急に作製されるべきことに言及しながら、そこに含まれるはずの同盟員の資格ないし条件として、革命闘争の支援と組織、ブルジョア文学との正面切つての戦い、階級闘争のアジ・プロの武器としての創作という三点を指摘。これと関連して、同盟の課題とは、一、プロレタリアの革命的な意味の創作をしてきた作家の結集。二、この文学の活動領域の拡大と弁証法的・唯物論的基盤にディクトワラ・ソヴェット・リテラチュラもとづくその文学理論の完成。三、批評と創造によるブルジョア芸術との戦い。四、青年労働者、労働者通信員の教育・助成。五、プロレタリアートの国家・ソヴェット連邦擁護への積極的参加、ソ連のプロレタリア革命文学との、理論および創造における交流等であるとした。そのほか、入会費、同盟費の問題、将来の機関誌発行に關

する問題、地区支部や外国との連絡の状況等を報告している。

次ぎのグリーンベルクは、先ず「できないことを期待するな」という言葉ではじめた。ソヴェトロシアの事情を一考してもわかるように、支配者となったプロレタリアートが、すぐさま新しいプロレタリア文化をひねり出すことはできない。プロレタリア文化の勝利のためにはプロレタリア世界革命が先行しなければならぬ。しかしこのことは、過渡期において準備するバイオニアの仕事を断念させるものではない、とグリーンベルクは語をついで、文化の物質的基礎を支配するようになったソ連のプロレタリアートの例を挙げて、プロレタリア文学の巨大な発展可能性を確認しながら、他方この可能性がまだはるかに小さい、革命の波間にある国において同盟の果たすべき課題の大きさを言う。そして自らも労働者通信員であった作家として、彼は「呼びかけ」に応えた各地方の「書く労働者」の期待の声を紹介し、結局それらは、労働者作家が強いられている孤立感からの反響であり、同盟はそういうわれわれの精神的な結晶点となって、プロレタリア革命作家たちの自信を鍛えなければならぬ。それだけでなく、作品を印刷され、読まれ、批評されたいという彼らの最高の期待にこたえねばならぬことを訴えた。それから、書く同志たちを検閲と迫害から護るべき任務と、逆に同じ革命運動の側において白眼視する妨害者の存在、そしてさいごに労働と政治活動と貧窮と無教養に苦しみながら、新しいもの、よりよいものを創り出そうとしている作家たちの姿を訴えたのである。

「ローテ・ファーン」の編集者であったストラングは、「アルバイタープレッセ」とは、資本家階級に対する労働者階級の戦いという地盤に立っていることを、あらゆる点で表現する新聞雑誌のことだと断ってから、軽妙な語り口で、労働者機関紙が労働者の多彩な要求にこたえていないこと、したがって読まれてもいず、また現体制の下では、半面それが必然であることを伝える。読ませるための新聞記者らしい具体的なアドバイスを幾つか示し、

いわゆる文芸娯楽欄の問題については、プロレタリア作家たちは、自分の流した汗水をその作物に塗りとくらねばならぬものと承知しているらしいが、労働者が新聞を読むのは満員電車の中か短い工場の休憩時間だということをお忘れだ。そうでなければ、これらの短篇は緊張した筋、ドラマチックな構成、論理的に明快な文体を具えたもつと生き生きしたものになっていよう。「作家同盟に労働者機関紙は何を期待するか」という本題も、こういう労働者のその機関紙に対する期待と同じである。『労働者生活の物語』は、老イボレねずみの博物学的記述なんぞではなく、ドラマチックな感動的なおもしろいスケッチとして表現されるべきだ。それに、労働者は労働者の生活不安にさらされているからこそ、満腹した小市民よりも「ハッピー・エンド」をはるかに必要とするのだ、と言う。さいごにスラングは、戦いと集団的協働への喜び、ソヴェトの模範、各国におけるプロレタリア革命の勝利の希望などの積極的な要素が、労働者のための文学をいっそう特徴づけねばならぬとつけ加えている。

ながい紹介のさいごに、もう一つだけ、作家同盟の「組織規約」草案について記しておきたい。これは、創立集会後の約一ヶ月のうちに開かれたらしい第一回同盟集会で承認されたものである。例えば「目的」として、「同盟は、すべてのプロレタリア革命作家の結集によって、特別の行動綱領の方針にもとづくプロレタリア革命文学の促進と布及を目的とする。作家の経済問題に働きかけることを断念するものではないが、『ドイツ・プロレタリア革命作家同盟』は特にその文学的、文化政策的目標に力点をおく。同盟は『労働組合の代用』と理解されることを拒否し、むしろ各同盟員が労組的並びに政治的な組織に属することを期待する」と書かれている。(さいごの文はわかりにくい点もあるが、結局この「目的」は、作家の相互扶助などではなく、あくまで文化的文学的大衆団体として同盟を性格づけようとしたものと解される) また同盟の行動細目ともいうべき「特別措置」と

いう項には、文学学校に類似する討論の夕べ、作者の夕べ等の開催、ラジオ講演の実現、労働者演劇・労働者ラジオ・労働者通信員運動等の支援、特定のカンパニアに際してのプロバガンダ材料の提供等々、十項目があげられている。「同盟員資格」には、「正業ないし副業として創作活動をなす作家および労働者通信員にして、行動綱領の意味におけるプロレタリア革命文学を肯定する者は同盟員となることができ……」として、以下に入会手続を規定している。(ここでも出てくる「行動綱領」なるものが、同盟創立以前から着手され幾度も執筆者と執筆方針とを変えて一九三二年によく決定稿となった「同盟の綱領草案」を言おうとしたのか、それとも二八年一〇月末のローテ・ファーンネに発表されたという「行動綱領草案」を具体的にさしていたのか、よくわからない。)それから「同盟費」では、入会金五〇ペーヒ、月額最低(一)五〇ペニヒ、とくに困難な場合には、猶予ないし一時免除されることができると規定してある。(これだけでも同盟の財政困難が思いやられるが、三〇年ハリコフ会議でのL・レンの発言によれば、当時約三五〇名の同盟員中二〇%以上が「常時失業者」で、同盟員の三分の一は同盟費納入不能であったという。)

以上のほかは、「幹事会」、「同盟大会」などについての規約である。

(三)

さて、すでに問題は山積している。右にぼくがかなり粗雑に紹介してきた創立集会での発言や、それらのことばで指し示そうとされた事実、又はされなかつた事実、客観的に大小さまざまの問題がでてきているし、ぼく個人の気持としても、性急な、むしろ素人じみた疑問が、解答を見つけ出すことなどという不可能だと思われるだけに、よけいにせっかちに答えをつかみとうとしてオオゲサな身振りで迫り出してくるようだ。政治と文

学、階級闘争の武器としての文学、作家と党、プロレタリア大衆の文学、プロレタリア階級の解放と解放のための戦いと、そして文学、アジプロのための文学と芸術としての文学、大衆としての個人、個人の論理と集団の論理……書いてみるだけヤボなことかもしれないが、しかし、ぼく個人がどんな口ぶりとも顔つきで語るにせよ、政治というものが、現代二〇世紀文学の最大の問題であることははっきりしているし、またそういう意味で、プロレタリア革命文学が（社会的歴史的人間という事実認識にもとづいて）もともと直接的に、原初的に、いわばモロに文学を政治にぶちつけたことも否定できないだろう。『調査、研究』に先走りして言うならば、プロレタリア革命作家たちは、階級社会という事実と意識がうごかぬ以上、文学と政治のそれぞれの具体的な本質を、人間の解放という一点の原理に集約することによって、両者を同一化し、そこからプロレタリアートの階級政治に階級文学を意識的に役立たせようとして文字通り血みどろの戦いをしたのではなかったらうか。つまり、現在のぼくらにとっての問題は、いったい『政治』とは何か、いったい『文学』とは何かという問いに追いつめられてゆく過程としてしか、文学研究なるものも不可能となつてはいないかということであり、だからまた、このプロレタリア革命文学運動を、単にいわゆる『政治』に従属した傾向『文学』という視点からのみとらえることも、いわゆる社会主義文学への過渡期的『古典的』文学という定見からのみ整理することも、伝統を現代にアクチュアルなものとして構成する方法ではないだろうということだ。

とはいえ、ドイツ・プロレタリア革命作家同盟が創立されたのは、一九二〇年代の具体的な歴史・政治状況にアンガージュした具体的な文学集団としてであったことは言うまでもない。ごくふつうの意味で、しかしまっとうな気持から言って、そこには人を肅然とさせずにはおかない幾多の事実が積み重なり、またそこから幾多の事実へ繋がっているはずである。いいわるいではない。正しかったかまちがっていたかではない。そこにある（あ

るいはあるだろうと想定される) 事実には圧倒されるのだ。ロシア革命以後の世界の革命運動について、いうにたらない断片的な知識しかもちあわせていない者、さらにマルクス、エンゲルス以後のいわゆるマルクス主義の古典的著作や理論についての「素養」もはなはだ不完全である者、つまり、革命運動の理論と実践において素人でしかないような者は、これらの圧倒する事実の重みに対しては、後退りしたくなるようなものを感じてしまう。たとえ、いままはシロウトこそ発言しなければならぬときだ」というひそかな格率をふりまわして突進するとしても、彼の発言は、鋭い針を使うべきところに棒をつっこんでしまうような結果に終るかもしれない。例えばさきにとロツキーの名を出したことも、たしかに素人の軽薄さでしかなかったろう。なぜなら、そのひとりのマルクス主義者の名は、現代の革命運動そのもののもつ、もつともアクチュアルな、もつとも凄愴な問題を呼び覚まさずにはおかないし、従って彼の名を公然と口にする者は、ほとんど必然的にひとつの激しいプロ・ウント・コントラに、実際上加担する責任と意識をもたねばならないからだ。(ただ、ここで急いで附け加えておけば、ベツヒャー自身、一九二四年にとロツキーのあとがきのあるデミヤン・ベードマイの訳詩集「大通り」を出しているという事実が、そのときぼくの記憶にあったからだ。)

とロツキーの問題にいま立ち入ることをやめるとして、結局、ここでは、客観的にも主観的にもプロブレマーティッシュな対象だけを相手に取組まねばならないわけだ。ぼくがとるべきさしあたっての方法は、たとえ素人のイナオリか軽率になるとしても、素人の率直さだけをたよりに、重い事実とその論理を確かめながら、そのことによって素人たることをやめるように、努める以外に手はない。

ドイツ・プロレタリア革命作家同盟の果たした仕事の意味を現在において考えようとすれば、何よりも先ず、

創立以後の同盟の、また各作家の活動や作品の総体を具体的に見てゆかねばならないし、とくに、一九二九年八月に創刊され一九三三年（一月号まで）三二年一一・一二月合併号まで出たことは確実）まで正式の同盟機関誌として発行された「リンクスクルヴェ」をたんねんに調べて総括するという困難な道を行かねばならない。

また、作家同盟のいわゆる生成史を考える場合にも、あくまでこれが文学集団・文学運動として、二〇年代における革命的インテリゲンチヤ作家、他方の労働者通信員・作家という、それぞれの文学主体の発展・要求・結合という側面から、その時期の全状況においてとらえるということが本題となるだろう。

実際、創立集会における諸報告をふりかえってみてもわかる通り、例えばベッヒャーの話は、ひとやいいきるとすれば、作家同盟は「下からの文学」の自己確立のための集団である、ということになろう。つまり問題は、やはり文学の問題である。

しかしそれにもかかわらず、この「下からの文学」の問題は「下からの政治」の問題に直接的に結びつかざるをえない。もっとも具体的な「下からの政治」に直結せざるをえない。事実、ドイツプロレタリア革命文学運動はドイツ共産党の政治運動に直結していたのである。

創立集会の各報告は、むしろ不思議に思われるほど、直接にKPDにふれて語ったところがない。このこと自体、たしかにひとつの問題として考えてみる必要があるかもしれないが、そのひとつの少し急いだ解釈として、それほど党との関係は各報告者にとって（また出席者にとっても）自明の前提であったと考えてみることは許されるだろう。だからまた、ぼくがこの覚え書の初めに書いた通り、創立集会に「党代表一名が同席した」ことも、自明のことからの単なるひとつの現象であつただろう。

しかしぼく自身としては、コトココにいたつた以上、党とプロレタリア文学という現在にも尾をひいているも

つとも取扱にくい問題を、報告者たちにならつて自明のこととして、全く素通りするわけにはいかないものを感じる。むしろ、ことを持ち出してしまったからは、ぼくなりにそのことを概括すべき責任があるので、そういうぼくなりの概括の、まだ不完全な第一章だけでも、書きつけておく。

(四)

冒頭に引用した作家同盟の一九二九年度の「活動報告」は、党に提出された報告であるが、その中の「同盟創立の歴史のために」という一項を全訳してみると、

一九二七年、モスクワで国際革命文学事務局（IBRL）の創立会議が開催され、これにドイツからヨハネス・R・ベツヒャー、アンドア・ガボア、ベルタ・ラスクが参加した。KPD中央委員会の同意をえて、ベツヒャー同志がドイツにおけるインタービューロー代表と決定された。同盟が創立されるまでは、作家同志たちはブルジョア的なSDS（ドイツ作家擁護協会）内のフラクションとして、かなりゆるい組織をもつにすぎなかった。フラクションは共産主義作家研究会（Arbeitsgemeinschaft der Kommunistischen Schriftsteller）と称したが、ほとんど活動を行わず、結局、右傾墮落してほぼ完全に影響力を失った。WAPP・グループ（全ロシアプロレタリア作家連盟）に属するロシアの同志たち、インタービューローの同志たちとの協議がなされて、ドイツに「プロレタリア革命作家同盟」を創立すること、その最大の任務は、自国のプロレタリア革命文学を形成し、かくしてまた、ソ連プロレタリア革命文学の、トロツキズムに対する闘争、右派および同伴者作家の危険に対する闘争を援助することであるとされた。一九二八年一〇月一九日、一名の党代表の同席と一五〇名の作家、労働者通信員、労働者有志の出席をえて、同盟は創立された。（Zur Tradition der sozialistischen Literatur in Deutschland.

Eine Auswahl von Dokumenten, Berlin 1962, S. 124 f. による。なお、これまで必要な出典を示さなかったが、創立集会の各報告等はすべて同書によっている。）

同盟創立にいたるまでの簡潔な歴史をしるしたこのいわば公式の報告には、ドイツプロレタリア革命作家同盟と全ロシアプロレタリア作家連盟とを軸とする「政治と文学」「党と文学」問題の、国際的な組織論的な見取図が、描き込まれているかのように見える。そこでこの見取図を手もとに置いて、ここに示された（あるいは「自明の前提」とされた）いくつかの事実を眺めてゆくと、先ず、一九二七年のIBRL創立会議は、すでにその直接の前身をもっている。O・エゴロフによれば（Zur Geschichte der sozialistischen Literatur 1918-1933, Berlin 1963, S. 215 ff.）一九二四年七月モスクワでソ連のプロレタリア作家代表団と第五回コミンテルン大会代表団との協議が行われ、各国プロレタリア作家連盟の結集と、これらの連盟のプロレタリア文学インターナショナルへの統合の必要が認められて、これを準備する「ピョー」が選出された。九月には、「今日真の芸術家にとって、プロレタリアートの解放のための戦いに加わる以外に打開の道はない」として、世界の革命的芸術家の団結を要請する「各国のプロレタリア的革命的作家への呼びかけ」を発表した。またこれとは別に、同年七月、多数の文学団体の署名をもつ「文化擁護、戦争反対のための作家の声」という呼びかけが出され、ここではロラン、フランス、シュウ等、親ソ反帝反戦の声をあげた外国の革命的、民主的、芸術家・作家にひろく敬意をはらっているという。つまりこれら二つの呼びかけは、プロレタリア文学のための作家的勢力範囲と、ピョーの任務について、従来（例えばプロレトクト運動）よりも、原理的により幅広い考え方を示していたという。

ところで、H・フッヘルトによれば（Zur Tradition, S. 322 ff.）ソ連におけるプロレタリア文学の最初の結節点となったのは、一九二三年、当時のプラウダに載せられたトロツキーの諸論説に反対して、若い党員批評家た

ちのグループが創刊した雑誌「ナ・ポストウ」である。ナ・ポストウ派の旗印としてフツペルトが挙げているのは、一、プロレタリア文学のヘゲモニーのための闘争、二、いわゆる同伴者作家（非プロレタリア作家）の徹底的なマルクス主義的批判、三、プロレタリア文学による同伴者作家の指導、四、ネットの影響によって迫り出して来たブルジョアの傾向に対する、党の断乎とした厳密な文芸政策という四点である。ナ・ポストウ派が、トロツキーの影響をうけた当時の代表的な理論家、編集者ヴォロンスキーとの抗争の過程で、一九二四年に創立したのがRAPP（ロシア・プロレタリア作家連盟）であり、これが中核となってその後まもなく全ソ連邦規模で組織されたものが、先きの「活動報告」に名ざされたWAPPであるということになる。その後のRAPPは、味方か敵かという偏狭なグループ意識や有名な唯物弁証法的創作方法というスローガンとともに、とくに一九三二年四月共産党中央委員会の文学・芸術団体の改組決議と、いわゆる社会主義リアリズムの唱導以後は、観念的な悪しき政治主義文学の代名詞のように、批判されているようだが、また事実そうであるとしても、「RAPPは、ある一定の時期（『論旨から見て、たぶん第一次五ヶ年計画の開始前の時期』）までは、党の政策を正しく徹底的に文学に具現した」というフツペルトの言葉（a. a. O. S. 328）は、大局的な、しかも評価を抜きにした事実そのものを言いあてていたのではないかと。ともかく、RAPPは、一九二五年の党中央委員会の「文学の領域における党の政策について」の決議で、一定の批判（例えば、同伴者作家をすべてブルジョア文学陣営に追いこむな、党は芸術形式について各流派の自由な競争にまかせ、文学の行政指導に反対。）を受けながらも、プロレタリア作家のイデオロギー的ヘゲモニーの確立という、党の政策を事実上押し進めていったようだ。

話をともにもどせば、こうしたRAPPが中心となった一九二四年のインタービューローと、その「呼びかけ」から、さしあたり二七年のIBRL創立会議まで、RAPPのプロレタリア文学観が一貫していたことは当然だ

つたろう。二七年以降ビューローを指導したペロ・イレシユは、二六年以前のビューローの活動の不毛を批判して、それは創立者たちの目的としたのが各国の「ナ・ポストウ派」からなる文学インターの結成にすぎなかったためだが、当時どこの資本主義国にもそんな連中にはいなかったのだ、……と、二八年に語ったという。(Zur Geschichte, S. 219)

ところが、十月革命十周年を機に開かれたIBRL創立会議(あるいはプロレタリア的革命的作家第一回国際会議とも呼ばれている)そのものは、エゴロフによれば、プロレタリア作家というより、かなり雑多な傾向の作家の集りとなったらしく、討論のすえ決定された方針は、一、ソヴェト文学と資本主義国におけるプロレタリア文学との条件の相違や各特殊性を認めたいうえで、二、各国における革命文学のヘゲモニーをめざす戦い、三、各国とくにドイツにおける作家同盟の組織化、四、帝国主義戦争とファシズムに対する戦いの必要であった。そこで、「ブルジョア的、民族革命的、自由思想的、ブルジョア急進的作家たちまで、できるかぎり活動に参加させようと試みなければならなかったので」活動分野をいささか右に拡張してしまったという二八年のイレシユの発言がでてきた。しかしながら、これに対して、IBRLは、純然たるプロレタリア組織ではなかったから、革命のおよび民主的作家のもっとも広範な集団に支えられてのみ、その活動の十分な効果を期待できたのであり、だから実際にはRAPPは唯一の正しい立場をとっていたのだという、今日のエゴロフのイレシユ批判は、そのかぎりでは当たっていると思われる。

ともかく、右の第三項はまる一年の後に実現されたわけである。会議に幾らか失望したらしいこのビューロー責任者自身、「われわれの第一回会議の直接の成果は——もっとも重要なものだけを挙げれば——ドイツプロレタリア革命作家同盟の創立であった」と語っている。

マゴビキに類する引用・紹介をかさねてきたあげく、みずからカクソウヨウの不快感と切迫した締切時間とに追われて、さいごの、たぶん完結しない部分を、一気につっぱしらねばならない。

ドイツ・プロレタリア革命作家同盟は、少くとも一九二四年以来のソヴェト・プロレタリア文学運動の形成過程に直接に組み込まれたものとして結成されたことは、以上の通りである。また同様に、そこから、国際的なプロレタリアートの文学組織の一環として、しかも一九二四年頃から二八年にいたる国際的な共産主義革命運動すなわちコミンテルンの政策に、直接・間接に結びついたものとして、つくられたことも明らかである。むしろこれは、作家と文学の主体にかかわらぬ組織論的な一事実を言ったにすぎないが、この、あたかも第五回コミンテルン世界大会から第六回大会にいたる歴史は、現在からみて、スターリンに対するトロツキーの抗争と敗北の経過とかさなさりあっているわけであり、これまで簡単にふれてきたように、そもそも「ナ・ポストウ」派—R A P P 結成そのものから、「二九年度活動報告」に明言された「反トロツキズム闘争の援助」という言葉にいたるまで、プロレタリア文学運動の創成・発展に一貫して、反トロツキズム路線がつきまといっていたことは否定することができない。そして、トロツキーのプロレタリア文化・文学の否定という事実が動かないとしても、だからプロレタリア文学をめざした若い作家たちが反トロツキズム闘争に終始加担したことはむしろ必然の成行きであったとしても、ソ連共産党指導部におけるスターリンの勝利、およびその後の独裁という純然たる政治権力領域における歴史事実がなければ、プロレタリア文学運動に占めるトロツキーのプロレタリア文学論は、もったいなかった視点から客観的に眺められたであろう。ともかく、(これはのんきな言いぐさかもしれぬが、)ドイツのプロ

レタリア文学運動は、レーンその他のマルクス主義者たちから学んだように、二四年に独訳も出た彼の「文学と革命」からも、率直に学んでよかつたろうと思われる。

一九二二年から二四年にかけて書かれた「文学と革命」のうち、プロレタリア文化・芸術、あるいは党の文芸政策についての四章から、いくつかの論点をとり出してみると、

第一に、ブルジョア階級は権力の座につく以前にすでに支配階級を文化的に凌駕し、文化の推進者となつていたが、一般にプロレタリアートの場合、とりわけロシアの場合、プロレタリアートはブルジョア文化の基礎的要素をわがものとして、文化に近づくことができる以前に、権力を取るべくよぎなくされた。第二に、従つて数年ないし数十年にわたる激烈な階級闘争、社会革命、プロレタリアート独裁という過渡期には、プロレタリアートが、文化に自らの刻印を押すことはありえても、もしも文化という言葉を物質的精神的創造のあらゆる分野における知識と能力の体系、十分に展開され内面的に調和した体系として理解するならば、新たなプロレタリア文化を創造することはできぬ。第三、プロレタリア革命は階級と階級文化を廃絶せしめるといふ人類解放的な目的をもつがゆえに、将来においても「プロレタリア文化」は存在しないだろう。第四、右の過渡期におけるプロレタリア・インテリゲンチヤの任務は、さしあたり、おくれた大衆が既成文化のもつとも重要な要素を体系的に批判的に摂取するという文化運動であり、その意味で、プロレタリア詩・通信などの作品も、未来の社会主義芸術のための困難な準備という重要な文化的、歴史的ドキュメントだ。第五に、「あばた面のみみず書きでもいいから、われらのもの、わが生みのものを」という声があるが、あばた面の芸術は芸術ではない。したがって労働者はそれを必要としない。プロレタリアートのための芸術は、二流の芸術であつてはならぬ。第六、だからまた、サークルの実験室的方法による「文学的マニファクチュア」をして、プロレタリアートの芸術上の利益を独占的に

代表させることはできぬ。第七に、「芸術は自らの道を自らの足で切り開いて行かなければならぬ。マルクシズムの方法は芸術の方法ではない。党が指導するのはプロレタリアートであって、歴史過程そのものではない。…芸術は党が命令を下すべき領域ではない。党にできること、またしなければならぬことは、芸術を保護し、これに協力し、間接的にだけ指導を行うことだ」等々。(邦訳トロツキー選集11の1による)

いくらかテーゼふうに着いて要約してしまったが、トロツキーのプロレタリア文化観のおおよそは察せられるかと思う。たしかにここには、いわゆるプロレタリア文化の否定が、まっこうから打ち出されている。トロツキーの誤りは、過去の偉大な封建文化やブルジョア文化、未来に出現すべき社会主義の文化だけを認め、プロレタリア独裁を文化的真空として扱い、現在を創造的な過去と創造的な未来とのあいだの不毛の割れ目と見た点とするルナチャルスキーの批判、および、プロレタリア独裁と社会主義への過渡期が、明確なプロレタリア階級文化を擡頭させないほど、短い期間と想像した点にあるというブハーリンの批判(Ⅰ・ドイッチャー、武力なき予言者・トロツキー、二一七頁より引用)によって、いちおう正しく指摘されているようだ。素人読みとしてのぼくの感想をつけ加えれば、彼はすこし潔癖すぎる「大芸術主義者」として、プロレタリアートのための芸術を熱望したために、革命的闘争と破壊の中から、それゆえまた多少とも必然的な行き過ぎ、矮小、ひねこびれのある姿で現われた若い歴史的な文学現象に対して、高飛車なところがあつたようだ。しかし、それにしても、彼が、階級を解放する階級としてのプロレタリアートに、普遍的な最高の芸術をと要請し、そのために「過渡期」の現実においては、芸術を啓蒙的文化活動に局限するという論理の中で、いわゆるトロツキーのプロレタリア文化否定論が出てくることを見逃がしてはならない。こういうトロツキーと、プロレタリア文学作家とのあいだには、非常に微妙な喰いちがい(だけ?)がある。逆行ないしは裏腹の関係のようにもみえる。どうやらここにも、例え

ばドイツの作家同盟が創立された頃日本で行われた芸術大衆化論争などではっきり提起された問題、つまり、アジプロのための文学と、芸術のための文学という二元論的な問題がひそんでいるかのようだ。RAPの理論を直接引用して論ずる知識もなく、日本のプロレタリア文学の論争にも系統的な理解を持たぬまま、かなり無責任な感想をさいごに書きつければ、プロレタリアートが階級を止揚する階級という自己矛盾を体現しているように、プロレタリアートのための文学は、本質的には最初から、アジプロ（大衆）のための文学と、芸術のための文学という矛盾を負うていたのではないか。それはまた政治と文学という矛盾でもあるだろうが、プロレタリア文学はこの両者の弁証法を意識的に具体的にとらえ、解決しなければならなかったのである。しかも、それはたんに組織論的に整理、解決できる問題ではなく、文学主体の根源にかかわっている。両者を計量、按分するようにはなく、ふたつを一点でいわば串刺しにするような論理を、発見しなければならなかったはずである。そしてこれは、トロツキーの場合にもあてはまるのではあるまいか？

肝心のドイツプロレタリア革命作家たちの同盟創立までの文学活動や組織活動における主体的側面、KPDの同盟創立に対する関係など、ほとんど何も書くにいたらず、いまはこれでうちきる。

参考書目を略記する。(主としてコミンテルン関係のもの)

W. I. Lenin: *Über Kultur und Kunst*; A. Rosenberg: *Geschichte des Bolschewismus*; ders.: *Geschichte der Weimarer Republik*; *Grundriss der Geschichte der dt. Arbeiterbewegung*; G. Nollau: *Die Internationale*; K. Parner, Th. Pinkus: *Der Weg des Sozialismus*; usw.

トロツキー選集第四、十一巻。ソ連邦共産党史第二冊。スターリン、第十五回党大会政治報告。トリアッティ、コミンテルン史論。アニー・クリジェル、インターナショナルの歴史。その他。

ドイツのプロレタリア革命作家同盟の創立について